状態表現の「ル」形と「タ」形

—両形式の意味とその近似性—

牟　　世　　鍾

1．問題設定

状態を表す表現の中には、次のように、ある客観的な状態が発話時である現在に続いているにもかかわらず、「ル」形でも「タ」形でも言えるものがある。

[1]┬a、この道は昔からある。
　　└b、この道は昔からあった。

[2]┬a、この建物は二ケ月前から建てている。
　　└b、この建物は二ケ月前から建てていた。

[3]┬a、彼は小学生の頃からこの家に住んでいる。
　　└b、彼は小学生の頃からこの家に住んでいた。

[1]～[3]において、aは現在の状態を表すものであるから、「ル」形を用いるのは当然であるが、bのように、「タ」形を用いても、その状態が現在まで続いていることを表すことができる。つまり、これらの両形式は共に現在の状態を表すと言えそうである。しかし、これは「ル」形と「タ」形そのものが同じ意味を表しているからではないであろう。一般的に「タ」形は過去を表す形式とされているが、[1]～[3]のbに見られるように、「タ」形を使ったからといって、その状態が過去の状態だけを表すとは限らない。もちろん、「タ」形は過去を表す形式であるから、現在を含まない過去だけの状態を表す場合は当然ある。[3]で、今はその家に住んでいないことがわかる場合、例えば、昔住んでいた家の前を通りながら話すときのように、その状態が現在まで続いていないことがわかる場合、それは現在の状態にはならないので「ル」形は使えない。

状態の表現において、「ル」形が現在を表し、「タ」形が過去を表すというように、「時の表現」の形式は一定した意味を持っていることによって、その役割を果たすものであると考えられる。しかし、[1]～[3]のように、一つの場面を見て二つの形式で表せるというのは、どう説明されるべきであろうか。

こういう点については、既に、三上章、寺村秀夫、高橋太郎氏など、多くの先行論文によって説明されている。しかし、何れも「ル」形と「タ」形の両形式が使われる理由が、いまだに明らかになっていないと思われる。

そこで、まず、従来の解釈の問題点を明かにし、それを踏まえて本稿の考え方を述べることにしたい。

2．先行研究の検討

三上章1953は、「テンスの対立は客観と主観との両方に沿ってあらわれる」と言い、「テンスの問題」の「心理的な完了と未了」に関して、次のように述べている。

心理的な完了と未了との対立は、主として未完成的な動詞にあらわれる。客観的事実としてはほとんど違わないが、或は全く違わなくても、それを経験として報告する（間接的に）か、知覚として表出する（直接的に）か、そういう主観的相違によってテンスを変える。

［4］コノ椅子ハ先刻カラココニアッタ

［5］コノ椅子ハ先刻カラココニアル

初の方は「先刻カラ」に重点があり、後の方はそこに重点がないという説明も成立しそうである。(…中略…)

客観的に事実を報告する過去形と、主観的な知覚や主張を表す現在形とは文章体でヒンパンニ混ぜ用いられる。

［4］は［5］と同じように、椅子はいま現在ここにあるということを表しているから、［4］［5］はともに現在の状態から出てくる表現である。普通、「タ」形で示される状態は過去を表すが、［4］が「タ」形で現在の状態まで表しているのは、文中の何かの要素によるからであろう。その要素が「先刻カラ」であるということは容易に指摘できる。しかし、「先刻から」があるからといって、「タ」形で現在の状況まで表せる根拠は指摘されていない。つまり、このような要素がある場合、なぜ「タ」形を用いてもその状態が現在まで持続していることを意味し得るのかという点が説明されるべきであろう。また、三上氏は、過去形は客観的な事実の報告であると述べているが、現在形も客観的な事実の報告である。［4］［5］は、現在、客観的な事実として存在する状態に対する表現であるから、むしろ現在形で表すのが客観的な表現である。従って、客観的な事実の報告には過去形で、主観的な知覚や主張には現在形で表すというのは、両形式の用いられる理由に対する正しい説明とは言えない。

寺村秀夫1984は「状態の継続ということについて」で、次のように説明している。

［6］a 叔母ハ病気デス

b 今日ハ暇ダ

c 父ハ京都ニイマス

のように、日本語の状態的述語の基本形は、発話時（すなわち現在）にある状態が存在することを表すこと、先に見たとおりであるが、これらの形は、また、

［7］a 叔母ハ先月カラ病気デス

b コノ一週間ハズット暇ダ

c 父ハコノ十年来京都ニイマス

のように、ある種の副詞句を伴うと、ある過去から現在まで継続していることも表すことができる。(…中略…)

日本語では、[6][7]のように、現時点での状態も、過去から現時点までの状態の継続も、同じ基本形で表すことができる。この点は、基本形に限ったことではなく、過去形についても同様であることに注意しなければならない。

[8] a叔母ハ先月カラ病気デシタ
b コノ一週間ハズット暇デシタ
c 父ハコノ十年来京都ニイマシタ
(…中略…)

[7]の方は、「現在まだその状態が続いている（そしてこの後もその状態が続くという含みがある)」という意味であるのに対し、[8]の方は「もうそのことは過ぎ去ったことだ」という意味にとれる、というのである。だから厳密にいえば、[8]の方は「過去から現在まで続いた状態」というのではなくて、わずかな時間にせよ現在の瞬間からはなれた過去に属する時点までの状態というべきなのかもしれない。

(…中略…)

「キノウカラ」「コノ一週間」のように、過去から現在までの時間の幅を示すことばと共に使われた場合は、—基本形が「今もそうだ」ということを表しているのに対して、—過ぎ去ったことだと見ていることを表すというのが自然な解釈だと思われる。「重点のおきかたの違い」というのは、視点がある過去から現在までの時間の幅の、端、つまり現在にある点では同じだが、いわばその話し手の視線が現在に向けられているか、過ぎ去ったかなたに向けられているかの違いというふうにいうこともできるだろう。

[6][7]の説明に見られるように、寺村氏は、現在を表す基本形は、[6]のように「現在にある状態が存在すること」と、[7]のように「ある種の副詞句を伴うと、ある過去から現在まで続いていること」とを表すと述べ、[6]と[7]が異なっている状態のように捉えているが、これは状態の現在を正しく捉えた説明ではないと思われる。基本形が表すのは現在の状態である。しかし、現在の状態というのは、他ならぬ過去からの続きであり、発話時には持続しているものであるので、別にある種の副詞句を伴わなくても、現在の状態は、過去から現在まで続いていることを意味する。従って、[6][7]は全く同じ状態の表現であると言える。これは次のような一連の対話からも簡単にわかる。

[9] A、叔母は病気です。
B、いつからですか。
A、先月からです。

単に「叔母は病気です」と言っても、「いつからですか」という質問と、その答えとしての「先月からです」が自然に出てくる。別に過去を表す要素がなくても、現在の状態を表す表現には、以前（先月）からという意味が自然に含まれている。つまり、現在の状態は過去からの続きであるから、Bのように、現在の状態を見て、それがいつからで

あったかということを質問できるようになる。

［6］［7］は現在の状態を表す表現であるから「ル」形が用いられるのは当然である。しかし、ここでは、［8］に「タ」形が用いられているにもかかわらず、［7］と全く同じ状況を表せるという点を説明しなければならないところである。いま現在、健康な人を紹介し、「実は先月から病気でした」と言ったら、その状態は現在には続いていないことになるが、いま現在健康であるという条件（病気から回復していること）を示さない限り、その状態は現在まで続いていることになる。同様に、［8］は、他の条件によってその状態の終わったことが示されない限り、文中の副詞句の機能によって、状態が現在まで続いていることが示される。従って、［8］は、［7］と全く同じ状況で用いられる表現である。寺村氏のように、［8］が現在の瞬間から離れた過去に属する時点までの状態であると考えるのは、これらが過去形であるからであって、全く同じ内容が二つの形式で表され得る理由の説明にはならない。［8］に「タ」形が使われるのは、過去の状態としてのみ捉えられているからではない。［8］も［7］も同じように、現在の状態を表す表現になり得るのである。寺村氏は、過去形であるから視線が過ぎ去ったかなたに向けられていて、現在形であるから視線が現在に向けられているという説明をしているが、現在の状態はすべて過去からの続きであるから、寺村氏の説明からすると、現在の状態を見る視線は自由に過去に向けることも、現在に向けることも出来、現在の状態は、結局、「ル」形でも「タ」形でも表現可能になる。また、寺村氏は「過去から現在までの時間の幅を示すことばと共に使われた場合は、過ぎ去ったことだと見ていることを表すというのが自然な解釈だ」と言っているが、現在の状態が過去からの持続であるということを考えると、過去から現在までの時間の幅を示す言葉とともに使われた場合、それは過ぎ去ったことではなく、むしろ現在のことを言うのであるとみなすのが自然であろう。だから、それには「ル」形を使うのが自然に思われるが、「タ」形を用いるのは、「タ」形でも、過去の状態を表しながら、その状態が現在まで続くということが示されるからである。以上のことから、寺村氏の説明にも、なぜ客観的に同一の状況が「タ」形でも、「ル」形でも表現可能であるのかという点は正しく説明されていないと言わざるを得ない。

3．状態の表現における「ル」形と「タ」形の意味

［4］［5］、［7］［8］に対する三上、寺村氏の説明は、その問題点を解決してくれない。そうであるとすれば、こういう表現はどう説明されるべきであろうか。これらは状態の表現であるから、まず状態の表現を吟味し直さなければならない。つまり、状態の表現における過去・現在という「タ」形と「ル」形の対立が、どういうものであるかということを考える必要がある。

［10］彼はいま部屋にいる。

［11］彼女は隣の部屋で本を読んでいる。

［12］彼は部屋にいた。

[13] 彼女は図書館で本を読んでいた。

[10][11]は、前から続いていた状態が基準時（現在）にまだ変わっていない段階で捉えられる表現である。[12][13]も、前から続いていた状態が基準時（過去）に変わっていない段階で捉えられる表現である。つまり、現在の状態は現在にその状態が終わっていないものであり、過去の状態は過去（表現される状態に接した時点）にその状態が終わっていなかったものである。このように、状態の「時の表現」というのは、状態の持続の中で基準時が位置づけられて捉えられるものであるから、過去の状態は言うまでもなく、現在の状態も、過去から続いている状態の中で捉えられるのである。結局、状態の表現における「ル」形は続いている状態を現在の存在として表す形式であり、「タ」形は続いている状態を過去の存在として表す形式であるということになる。

状態の表現は、その状態に接した時点を示しているが、それ以外、何も示していないものでもある。つまり、状態の表現はその状態がいつ始まっていつ終わったか（あるいは、いつ終わるか）を問題にしない表現である。現在の状態の表現は状態に接した時点が発話時であるから、その状態は発話時と対応して存在することが大前提である。現在の表現が状態でなければならないのもこのためである。同様に、過去の状態の表現も、その状態に接した時点を示してはいるが、それ以外には何も示さないものである。つまり、過去の状態の表現は、まだその状態が終わっていない段階で捉えられるが、状態に接した以後、その状態がどの時点まで続いていたかはわからないのである。だから、「タ」形で表される状態には現在まで継続している場合と継続していない場合が想定されるが、「ル」形で表される状態は全て過去からの続きの状態である。

[14] A　田舎には昔それがあったよね。
　　B　いまもあるよ。→現在まで続く状態
　　（しかし、今はないね。→現在まで続かない状態）

[15] A　あなたは昔あれをしていたよね。
　　B　いまもしているよ。→現在まで続く状態
　　（いまはしていないよ→現在まで続かない状態）

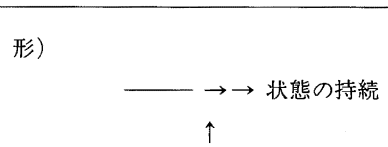
[16] A　昔は恐竜が存在した。
　　B　今も存在するよ。→現在まで続く状態
　　（今は存在しないよ→現在まで続かない状態）

[14]～[16]からわかるように、Aは、昔あった状態が現在まで続いているかどうかを知らないが、その状態に接した時点が過去であるから、「タ」形を使っている。しかし、Bは、その状態が現在まで続いていることを知っているから、Aにおいては過去の状態であるものを、「ル」形を使って、現在の状態として表現している。つまり、Aは過去の状態だけを言っているが、Bによって、その状態が現在にも続いていることがわかる。これは、過去の状態の表現はその状態に接した過去の時点だけを捉えて表現するものであるが、その状態は現在まで続く場合もあるということを意味している。

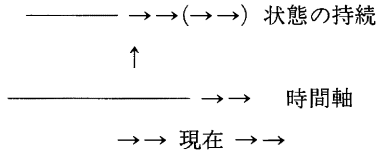
以上をまとめて図にすれば次のようになる。

【図1】

・現在の状態（「ル」形）



・過去の状態（「タ」形）



図に示したように、「ル」形が表す状態は過去から現在に至って、まだそれが終わっていないものであるが、「タ」形で表す状態は現在のことを言わないだけであって、その状態が現在まで続いていても続いていなくても構わないものである。図の→→（→→）において、矢印は状態の続きを示し、括弧はその状態が続いている場合も続いていない場合もあるということを意味する。つまり、「タ」形は、過去の状態だけを表すのであって、その状態が現在まで続いていることに関しては非明示的であるから、過去の状態が現在まで続く可能性を内包する。だから、過去の状態が現在まで続いているということが何等かのことで示されるとすれば、「タ」形は、「ル」形と同じように、現在までの状態を表すことになるであろう。文に示されている何等かのことというのは、過去の状態が現在まで続いているということを示してくれる要素である。その要素が[1]～[3][4][8]の文中にある「～から」である。[4][8]で、「タ」形が現在の状態を表すのは、「タ」形がもっている非明示的な部分を「～から」という文中の要素が明らかにしてくれるからである。つまり、状態が現在まで続くか否かについて非明示的である「タ」形が、「～から」によって、その非明示的な部分を解消するようになる。

[1]～[3]のような対は、異なる意味を持つ「ル」形の状態表現と「タ」形の状態表現とが、その他の要素がもたらす意味によって、文全体としては非常に近似した意味を持つようになるのである。しかし、「ル」形と「タ」形はそれぞれ異なる意味を持っている。だから、「～から」のような要素がない限り、「タ」形でその状態が現在まで続いていることを表すことはない。

[17]┬ 昔からそこに井戸が<u>あった</u>。（○）
　└ 昔からそこに井戸が<u>ある</u>。（○）

[18]┬ 昔そこに井戸があった。（○）
　└＊昔そこに井戸がある。（×）
[19]┬ A先生は5年前からB大学にいた。（○）
　　│（今は他の大学にいる）
　　└ A先生は5年前からB大学にいる。（×）
　　（今は他の大学にいる）

[17]のように、状態の表現はその状態がなくなったという終了点が示されず、始発点だけで示される場合、「タ」形でも「ル」形でも表現できる。それは始発点だけがあって、終了点がないことから、状態は現在まで続いているということが示されるからである。現在までという時間的な幅がわかる限り、状態は始発からまだ終わっていない現在まで続いているものになり、過去の状態を表す形式でもその状態は現在まで続いていることになる。だから、過去を表す「タ」形を使っても、その状態が現在まで続いているということは示されるので、一つの状態を二つの形式で表現しても構わないのである。しかし、[18]のように、過去しか示さない「昔」だけがあって、現在までという状態の時間的な続きを含む「～から」のような要素がなければ、それはただの過去の状態を表す表現にしかならないので、「ル」形は使えない。つまり、[18]は、現在の状態から、過去の状態を問題にする表現にもならないし、また、「タ」形をもって現在の状況を表すような表現にもならない。ただし、[19]のように、「五年前から」という始発点だけで示されていても、その状態の終了点のあったこと（A先生はもはやB大学にはいないということ）が話し手、聞き手の間に了解される場合、その状態は現在まで続いていないことになるので、これも「ル」形は使えない。

以上は、「タ」形が現在の状態に関して非明示的であるという点と、「ル」形が過去から継続している状態を表すという点から生じる現象である。だから、[17]のように、現在の状況を表すときには両形式の使用が可能になる場合もあるが、[18][19]のように、現在には続かない過去の状態を表す場合に「ル」形の使用が不可能である。

さて、「ル」形と「タ」形が異なる意味を持っていながら、その他の要素によって近似した意味を表すのは状態の表現の場合であった。これに対して、動きの成立を表す表現はどうであろうか。

[20] 今度の夏休みには旅行に行く。
[21] 今度の夏休みには旅行に行った。
[22] 私は大学院の二年次に論文を書く。
[23] 私は大学院の二年次に論文を書いた。

[20]～[23]のように、動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形は、現在である発話時に、すでに成立してしまった動きか、それとも、まだ成立していない動きかということを表すものであるから、動きの成立時点が明確な事象において、「ル」形と「タ」形が異なる意味を持ちながら、状態の表現のように、近似した意味を表すことはない。つまり、「行った」「書いた」という形式が、文中の他の要素によって「行く」「書く」

の持っている意味を表すようなことは有り得ない。これは、状態の表現と動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形が持っている時制的な対立の様相が異なっていることを意味する。つまり、状態の表現における「ル」形と「タ」形の違いと、動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形の違いは、その内容を異にするものである。

4．結論

「タ」形による状態表現は、「過去のある時点において、ある状態であった」という意味しか持っていない。すなわち、現在時においてどのような状態であるかについて、基本的には非明示的である（すなわち、文中の他の要素や、前後の文脈などの、他の条件が決まらない限り、決まらない）。一方、「ル」形による状態表現は、「現在時において、ある状態である」という意味しか持っていない。この意味で、「タ」形の状態表現と「ル」形の状態表現とは、明らかに異なる意味を持っており、「タ形が過去のことを表し、ル形が現在のことを表す」という点においては自然な対立を示していると言える。

「タ」形の状態表現は現在時の状態について、また「ル」形の状態表現は過去の状態について、それぞれ非明示的である、という点に注意すべきである。このことは、「タ」形の状態表現も適切な他の条件が揃って、それぞれ非明示的な部分の意味が定まれば、「過去のある時点から現在まで、その状態が継続している」という意味を持ち得ることを示している。本稿が問題にした[1]～[3]における対は、まさにそのような意味を、「タ」形の状態表現と、「ル」形の状態表現とがともに実現している例である。

先学の指摘のように、「時の表現」は様々な要素が関わって決定される。しかし、先行研究には、客観的に同一の状況が「タ」形でも「ル」形でも表現できる根拠が明らかにされていない。それを明らかにするためには、まず、事象が何であるのか、つまり、状態の表現であるのか、動きの成立の表現であるのかを区別した上に、状態における「ル」形と「タ」形が、どういう違いなのかということを説明する必要がある。

従って、本稿で取り上げた現象は、状態の「時の表現」における「ル」形と「タ」形が持つ対立的な意味を明確に保っているもので、「時の表現」の例外ではない。さらに、状態の表現における「ル」形と「タ」形、そして、動きの成立の表現における「ル」形と「タ」形の対立の仕方は明らかに異なっている。

参考文献

高橋太郎　1983　「スルともシタともいえるとき」『金田一春彦博士古希記念論文集』第一巻　三省堂
――――　1985　『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』　国立国語研究所
寺村秀夫　1984　『日本語のシンタクスと意味』第II巻　くろしお出版
三上　章　1953　『現代語法序説』刀江書院　復刊　くろしお出版　1972

（筑波大学大学院　文芸・言語研究科　日本語学）